



TITLE:

# 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館月報 No. 150

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館月報 No. 150. 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館月報 1965, 150: 47-50

ISSUE DATE:

1965-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186888>

RIGHT:

# 水族館月報

No. 150

1965年2月

## 2月の入場者数

一 般		団 体		有料合計	特別観覧
大 人	小 人	大 人	小 人		
56,943	721	18,507	220	76,393	380

前年度比	1964	1965	増 減
入場者数	69,914	76,393	+ 6,479

## 水族館記事

- ◎ 4日 水族館より、研究室、実習室への海水給水主管（4インチ鉛管）は、標本室東側道路の埋設部分より漏水がひどくなったので、水族館中庭からこの部分までを硬質塩化ビニール管と取替えた（西村水道）。  
また、この機会にNo.24、40の給水管（従来埋設式であったため取扱いに不便であった）を垂下式に改めた。
- ◎ 同日 本学奥田総長、横田事務局長、速水理学部長、市川所長、宮谷事務長等一行視察来所。  
翌5日、実験所および水族館の将来計画を現地教官より説明した。
- ◎ 5日 堺浦のクエ延縄漁師より、エビスザメ（全長186cm、体重31.5kg）が入槽、No.24水槽に収容した。  
本種は いわゆる人喰ザメではないが、外洋性で、歯がかなり鋭いので、客に危害を与えないよう、また、この水槽は俯観式であるため、客のいたずらがた

えず、しかも エビスザメが表層を泳ぎ廻るために、それにさわろうとする者が多いので、水槽のまわりに巾50cmの網をとりつけた。

その後1週間は、槽内を悠然と泳ぎまわり異彩を放っていたが、捕獲時の外傷が悪化し、8日目から動作が次第に緩慢となり15日に死亡した。

- ◎ 9日 附近の岩礁に、冬季着生するアマノリ、メノリを雑食性魚類の餌として、試供したところ、チョウチョウオ類、ニザダイ類がかなり良く食べることがわかったので、これをサンゴ礁魚類の餌に定常的に加えることとした。

- ◎ 13日 堺浦よりハナザメ（全長185cm、体重33kg）が入槽。

前記のエビスザメと同じく、クエ延縄にかかったもので歯が非常に鋭く、人喰ザメの仲間に入られているものである。

このサメは体の平衡を失ったまま狂泳したり、水底に横たわったりするので展示水槽には入れられず、屋外ウミガメプールに収容した。

その後失衡状態が回復しないまま、23日に死亡。解剖の結果、内臓諸器官には内出血が認められず、失衡より死に至った主因は、漁獲時の打撲ではなく、低温によるもの（当時の水温11.7°C）と思われる。

体表には入槽時に見られなかった白斑が多数現われていた。

なお、エビスザメ、ハナザメとも、頭部と尾部だけを固定保存することとした。

- ◎ 20日 G水槽へ新着のタカアシガニ雌2個体を収容。

例年この頃に捕獲されるタカアシガニは生殖回游群なので、5月上旬までは、水槽内でも雌の奪い合いから斗争がたえず、そのために歩脚を損じて死に至るものが多かった。

この対策として、本年はG水槽の中央を網で仕切り、前年から飼育中のカニと新着カニを隔離することにした。

- ◎ 24～26日 荒賀助手は上野動物園水族館での飼育技術者研究会に出席。

そのあと、同館および読売ランド水族館を見学、調査した。

- ◎ 2月の動物入手概況

#### 1. 採集作業

日 時	採 集 場 所	方 法	人 員	主 な 目 的 動 物
3日午後	南浜防波堤附近	磯 採 集	1	カメノテ、フジツボ類
8日午後	塔島東～かなとこ	SCUBA潜水	3	熱帯性の磯魚
13日午後	〃	〃	3	〃
15日 夜	南浜防波堤附近	夜間磯採集	1	潮間帯の動物
16日 夜	番所崎灯台下	〃	1	〃
19日夕方	塔 島 西 磯	打 網	2	磯 魚

上記のほかに地引網便乗採集 3 回。

今年は暖冬のため例年より早く、2 月 14 日から地引網漁が始まった。

ウスバハギ、ウミスズメなどが多数入槽したが、暖冬とはいえ低温のため歩止りは極めて悪かった。

2 月に入っても、まだ、附近の岩礁で越冬している熱帯性魚類がかなり認められる。

13 日の潜水採集のさいに水温を測定したところ、「かなとこ」附近の海底（水深 15 m）で 16.0°C であった。また、この日に新調の大型捲網（高さ 2.5 m、長さ 10 m）を始めて用いたが、小型捲網では捕えにくかったスズメダイ、イトヒキベラなどを容易に採集できた。

主な採集動物名（☆印は 1962 年 4 月 1 日以降はじめての入槽動物）

無脊椎動物： ☆アカクラゲ、ピロウドトゲトサカ、トゲナシヤギ、アカヤギ、カメノテ、クロフジツボ、ムラサキゴカクガニ、ノコギリガニ、☆カモンダカラ、☆コモンダカラ、ミスガイ、ヒカリウミウシ、ホウズキフシエラガイ、ウミギク、ミミイカ、ヒメコウイカ、オキノテズルモズル、アカウニ。

魚 類： ムギイワシ、トウゴロウイワシ、クロサギ、ホウセキキントキ、タナバタウオ、ミナミゴンベイ、クマノミ、スズメダイ、イトヒキベラ、ハタタテダイ、オニハタタテダイ、テングハギ、ニザダイ、ウスバハギ、ウミスズメ、☆サザナミフグ、ハシナガウバウオ、

## 2. 購 入

堺、芳養の延縄漁師からの入槽が主で、無脊椎動物の購入はタカアシガニだけであった。

主な購入魚類名： ☆エビスザメ、☆ハナザメ、ナヌカザメ、ホンザメ、ガンギエイ、ユリウツボ、サビウツボ、オキノシマウツボ、オキナヒメジ、セダカアカハタ、チダイ、ニセフササカゴ、セミホウボウ。

## ◎ 飼育概況

例年この月には低温のために死亡する熱帯性の無脊椎動物（オ 1 水槽室開放式水槽で飼育）が、今年は暖冬のため元気で、真冬にもかかわらず下記のコレクションを維持できた。

J 水槽の磯魚の白点病は先月にひき続き慢性化したまま、根治できなかった。そのほか、T-1・T-5 両槽に発生したが、初期治療により被害はほとんどなかった。また、T-1 水槽のミツボシクロスズメ 1 尾が逆鱗症（一名まつかさ病）にかかり、アクリフラビン浴、ネグボン、硫酸銅浴などを試みたが奏効せず、13 日に死亡した。幸い、この病気は他魚へは感染しなかった。

2 月 28 日現在、飼育中の動物は、総計 494 種 3442 個体以上で、その内訳は次の通り。

このうち、観覧水槽に飼育、展示中の動物は 478 種 3120 個体以上。

カイメン類 1種 1 個体	ゴカイ類 4種 8 個体	イカ類 2種 2 個体
ヒドロ虫類 2" 14 "	カブトガニ類 1" 2 "	タコ類 3" 7 "
ハチクラゲ類 -" - "	フジツボ カメノテ類 4" 162 "	ウミシダ類 5" 15 "
ウミトサカ類 7" 28 "	エビ類 15" 187 "	ヒトデ類 8" 108 "
ヤギ類 9" 52 "	シヤコ類 2" 2 "	クモヒトデ類 5" 13 "
ウミエラ類 1" 6 "	ヤドカリ類 14" 154 "	ウニ類 14" 95 "
イソギンチャク類 10" 121 "	カニ類 40" 148 "	ナマコ類 7" 31 "
イシサンゴ類 13" 81 "	アメフラシ類 12" 35 "	ホヤ類 7" 48 "
ツノサンゴ類 2" 3 "	二枚貝類 15" 246 "	軟骨魚類 9" 49 "
ハナギンチャク類 1" 15 "	巻貝類 42" 507 "	硬骨魚類 233 1266 "
ホウキムシ類 -" - "	ヒザラガイ類 1" 5 "	カメ類 3" 28 "

資 料

2月の気象（午前9時観測）

オ1水槽室（水温・比重はNo.24水槽）

	上 旬	中 旬	下 旬
晴天日数：24	7	9	8
室温（ $^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{7.7 \sim 13.0}{9.9}$	$\frac{10.0 \sim 14.0}{11.4}$	$\frac{7.9 \sim 14.3}{10.0}$
水温（ $^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{12.0 \sim 15.8}{13.9}$	$\frac{13.0 \sim 15.6}{14.3}$	$\frac{12.0 \sim 15.5}{13.8}$
比重（ $15^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{25.64 \sim 25.99}{25.80}$	$\frac{25.44 \sim 25.76}{25.67}$	$\frac{25.62 \sim 25.89}{25.75}$

オ3水槽室（水温）

H水槽（ $^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{21.0 \sim 23.0}{21.6}$	$\frac{21.0 \sim 23.7}{22.3}$	$\frac{21.0 \sim 23.0}{22.2}$
T-8水槽（ $^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{13.0 \sim 15.8}{14.4}$	$\frac{14.4 \sim 15.7}{15.0}$	$\frac{12.4 \sim 16.3}{14.0}$

海水取入口

水温（ $^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{12.5 \sim 16.0}{14.1}$	$\frac{14.0 \sim 16.2}{15.0}$	$\frac{13.0 \sim 16.2}{14.1}$
比重（ $15^{\circ}\text{C}$ ）	$\frac{25.74 \sim 25.98}{25.86}$	$\frac{25.75 \sim 25.97}{25.86}$	$\frac{25.69 \sim 25.89}{25.83}$

昭和 4 1 年 3 月 1 5 日 ( № 1 5 0 )

編集兼発行者 市 川 衛

発行所 京都大学瀬戸臨海実験所

和歌山県西牟婁郡白浜町

電話 ( 白浜 ) 2047. 3515